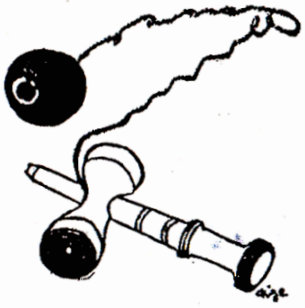

〈お寺の聞法板〉より

「縁あればこそ
今日のいのち」

目　次

平成七年九月

☆お盆について思うこと(後)
……アグネス・エンジェスカ　土岐慶哉(訳)　1
☆娑婆に生まれて何故よろこぶ　…永寿厚信　6
☆『落葉のころ』　……和氣良晴　9
☆仏心　真宗宗歌　②　……泉　康雄　13
☆ブラジル日記より
即如ご門主伯国ご巡教随行記　④　…利井明弘　15
☆ビハーラ講座⑦
ビハーラの理念(一)　……日野和憲　17
☆新・『今月の顔』　⑫　佐々木久子師…北原光　20
☆お浄土でお会いしましょう　……西原祐治　22
☆おうやまい　……足利孝之　24
☆門徒弟子の章　(2)　……鎌田宗雲　27
☆読者の茶の間　……山田泰子　31

表紙絵……清野　蒼花　カット……妙楽ちが・いはほ

お盆について思うこと（後）

アグネス・エンジェスカ
土岐　慶哉（訳）

四

親鸞はこの経験を信心と述べ、自己の信心が釈尊の教説にもとずき、七高僧によって伝えられたことを細かく教えて下さっています。

釈尊はお弟子たちに、ご自身の往生後五百年までは、同様な方法で悟りに達する可能性があると説かれました。その後は世情が悪化して、最後には弥陀の本願念仏門しか悟りを得る道がなくなると説かれたのです。

聖人は末法の世に生きていて、念仏が唯一の道であると痛いほど感じ取ったのです。念仏がいかに強力で普遍的なものであるかを学びかつ体験したのです。聖人は念仏の普遍性が仏の対機説法と密接な関係のあることを熟知しました。聖人は、法蔵菩薩が願を立て、何ものにも妨げられぬ三千世界に通用する念仏行を成就せられたご苦労が、いかほど大きいものであったかを本当に感じとったお方なのです。

聖人は最後に、あらゆる仏教の行も、伝統も、釈尊のこの世に歴史的人物としてのおでましさえも弥陀の本願ゆえに可能であったと感じてお

られるのです。

親鸞聖人は、誰も念仏するのではなく、弥陀が念仏せられるのだということを自己の体験から百もご存じであったのです。念仏は衆生が参加するために与えられた仏行なのです。念仏することは、昔も昔、五劫の思惟によって得られた弥陀の清浄な行に加わるということなのです。

私たちは名号を称えるだけですが、同時に如来が名号に封じこめられた仏行の功徳を受けるわけです。そしてこれらの功徳利益は私たちの生活をいよいよ納得のいくようにして下され、ますます受容できるもの、利益あるものにして下さるのです。そして一歩また一歩と仏の悟りへと近づいてゆくのです。

名号の中に生き、名号と共にあって、私たちは次弟に平安な心を体験し、安心に達するのです。私たちはまた人生の意味が見えてくるから、弥陀に対して自発的な感謝の気持ちを感じ始めます。煩悩にしばられてはいるものの、念仏に摂め取られて、私たちの生活はとても貴重な生活であり、仏法を直接体験できる唯一の道であります。

もし私たちが苦をも含めて一切が、自己の成長に役立っていると判ったならば、もし私たちが自分の死をも含めて一切が、あくまで道理にかなっていると感じるようになったならば、ほっと気持ちが楽になり、正直なところ感謝の気持ちもわいてくるのです。

何が最善かと判れば、極めて実践的かつ有効な智慧を得ることができ、何の妨げもなく智慧に従えるのです。信心はとても喜ばしい体験です。そして謝念もとても自然です。私たちの感謝の念仏はとても自然です。私たちは念仏につ

いて考えたり、論議したりいたしません。私たちは全く念仏の中におり、念仏と一つなのです。

五

私たちの悟りは念仏から始まり、念仏によってもたらされ、念仏の中で発展します。そういうものです。

私たちの悟りのそもそもの起因は、本願なのです。本願は念仏となって、はたらくのです。念仏はまだ輪廻の中で生きている人間に、浄土の体験をもたらします。浄土とは完全であって、退転はしません。信心は死後ではなくて、ただ今、流転輪廻の凡夫に、かかる身分を与えられると聖人は仰せられるのです。

私たちは末法の世に生きていると釈尊は仰せられました。仏法をまだ学べますが、就くべき善き師を発見することは、すこぶる困難です。末法のこの世で、完全な悟りは実現不可能です。凡夫にできる最上の道は、流転の凡夫に与えられる仏心すなわち信心あるのみです。信心を得る唯一つの保証せられた道は念仏なのです。

日本語の信心という言葉はいろいろの意味内容があります。含蓄の深い術語です。この言葉をあまり詮索しすぎないで、念仏行に加われば聖人と同じ体験――仏心と仏智を与えられるでしょう。それなのに、信心という語を言語学的に、または比較宗教学的にだけ研究しようとすれば、袋小路に陥るでしょう。煩悩に縛られたはからいでは、聖人とは別の信心となってしまいます。

ついには、弥陀と本願におまかせすれば、臨終に救われてめでたしめでたしという結論へ飛躍しかねません。かような基教的な解釈は聖人の体験とは似ても似つかぬものなのです。それ

は私たちのエゴの陳腐ないたずらにすぎません。もし私たちが浄土を死期まで延期するならば、浄土を死後に約束された土（ど）という神話の中へ入れてしまう不都合をおかしてしまいます。それでは私たちのいる現実とは何の関係もないものになってしまいます。

若し私たちが真実信心を実感する代りに、信ずるだけで十分だと結論するならば、仏教徒の精神的な共通性を捨て去ることになります。私たちは自己の空想を追いかけるか、他の人々と空想を共にするだけということになってしまいます。このため私たちは決して信心を基教のFaith（普通信・信仰と訳される）と同一視すべきではありません。固く申しておきます。

六

浄土の真実義は私たちが元気はつらつとしている間に、ただ今実現されるべき教えと聖人によって開顕せられたのです。絶対的悟りの真実の機会として、私たちが与えられている唯一の保証はこの信心の瞬間に、この悟りをスタートさせることです。これは大事なことです。

信心の体験は智慧ですから、私たちは真実の法（ダルマ）について、絶対的に明かな認識を与えられ、判断に迷うことはなくなるのです。私たちの生れた国の言語・伝統・文化とは関係はありません。

私たちは宇宙的な大きさ、普遍的な国際化を与えられ、ますます通常の限界を超えて生き始めます。

肉体は限界を感じるでしょう。肉体は老い、わずらうこともあるでしょう。しかし私たちの精神は何らの限界もない大きさへ、一歩また一歩と進むでしょう。口にみ名を称えることによって仏凡一体となる、この真実の、仏心と仏と

の一つであることの全く体験的な確認を親鸞聖人は信心と仰せられました。

七

信心の人は死を恐れる必要はありません。彼らは生死は肉体だけの問題であるとちゃんと承知しているからです。私たちがみ名によって阿弥陀仏と一体になることを体験すれば、その時に生死を超えるのです。私たちは仏と同じく無限となります。

かかる経験には不純なものはありません。それは信心の時にとても実際的であり明白なのです。でも、私たちがただ喋々と信心についてしゃべったり、知的分析のみに走ったりすれば、袋小路に突きあたるのが落ちとなります。念仏の中に学べば、有用で創造的です。しかし私たちが工学を学ぶように仏教を研究すれば、聖人が自力と呼ばれたことをすることになります。それこそ聖人の欲せられぬことをすることになります。私たちは仏になるまで、仏さまの全体を理解することなど出来ることではありません。しかしながら名号すなわち仏であると本当にわかった時に、私たちはいわゆる他力念仏がわかり、弥勒とひとしと申されてあります。この時に、私たちの死は新しい意味をもってくるのです。輪廻と苦から永遠に自由になるという意味です。皆様ひとりひとりに、かように死から自由になられることを希望します。それこそ私たちみんなお浄土で会うことです。ともにそこへ生まれさせていただきましょう。

なもあみだぶつ。

（ハワイ本派機関誌「メッター」一九九四年六月号所載、筆者はポーランド生れ、横浜市光輪寺坊守）

（訳者・富山県高岡市利屋町31・専福寺）